

## 歌劇《ポントの王ミトリダーテ》K.87 (74a) の初稿

野口秀夫

## オリジナル・アリア集について (イアン・ペイジ、野口訳)

モーツァルトのオペラの中でミトリダーテの番号曲ほど多くの異稿・スケッチ・断片・ヴァリアントのあるものはほかにない。7曲のアリアと1曲の二重唱曲のオリジナル稿が残っており、それらは放棄されたか初演以前に適用されていたものだ。これらのうち6曲は完成されている ("Lungi da te" はほぼ完成)。初演の配役たちがオペラ・セリアを書いたことのない14歳のよそ者を疑ったことはおそらく避けられないことであったが、彼らの書き換え要求の理由は実務的考察が反映されているようであり、いくつかのケースでは音楽そのものの質的判断というより彼らの虚栄を反映しているようだ。

## No.1 "Al desitin che la minaccia 迫り来る運命から" (Aspasia)

モーツァルトのこのアリアの初稿はト長調。先行するレチタティーヴォの終止の調である。アスパーシアの高位の威厳と哀調を帯びた脆弱性を結び付けているが、アントーニア・ベルナスコーニ —— 既にプリマ・ドンナとして名を馳せ、3年前にはグルックのアルセストの主演を演じていた —— がオペラ開始のアリアにより祝祭的な技巧の曲を要求したのであろう。ハ長調の最終稿を書くことによりモーツァルトは一对のトランペットを追加でき、堂々とした輝きを音の世界に導き、ベルナスコーニは結果に必ずや満足したことであろう。

## No.8 "Se di lauri il crine adorno 月桂冠を頂いて" (Mitridate)

このアリアは主にテノールのグリエルモ・デットーレの気難しい要求により、モーツァルトが最も困難に直面した曲である。4つのスケッチ、3つの異なる調のものがあり、そのうちこのハ長調の曲は最も完成度が高い。最後の数小節を除くすべての歌唱声部を含み、バスラインはBセクションの終わりまで、ヴァイオリンパートはヴォーカルフレーズ間の4小節の導入部と4つの短いヴァイオリンの入りの部分(各々1あるいは2小節の長さ)を含んでいる。

この比較的乏しい材料から、惜しくも亡くなったスタンレー・セイディは非常に熟達した手法で、いかにもモーツァルトらしいアリア完成版を肉付けした。最初から技巧的にヴァイオリンのトリプレット音型を延長し標準的な2本のオーボエ・ホルンのオーケストレーションを追加した。私はこの完成版の初演を指揮する荣誉に与ったが、数年後このオペラの舞台プロダクションにも協力した。この録音のために再び戻ってくるにあたり、私はいくつかの小さな表面上の変更をさせていただいた。主に伴奏ヴァイオリンの装飾音と1~2箇所オーボエ・パートの重複である。これらの変更はトータルで数十箇所になるだろうが、私はほとんど気が付かれないことを期待し、そうであろうと推察する。すべての真の仕事はスタンレーのものであり、名誉はすべて全く彼に帰する。

## No.9 "In faccia all'oggetto 愛する方を目の前にして" (Ismene)

イズメーネの最初のアリアに対するモーツァルトの当初の曲はオーボエ・ホルン・トランペットと弦楽にスコアリングされていた。トランペットの使用が —— 特に驚くべきことに変ロ長調でイズメーネのただならぬ落胆の気持ちを表明しているが —— 素晴らしく円熟した磨かれた響きをアリアにもたらした。三拍子がまた予想外で、ゆがんだ物足りなさをドラマの状況にもたらしめている。モーツァルトのこのアリアの最終稿はすべての点でオーソドックスであり、弦のみのスコア、四拍子に復帰している。それはイズメーネの声の証しをより表現的に確固たるものにし、しかし、おそらくよりオリジナルで内省的な性格付けを惜しみなく表現したものであった。

## No.13 "Lungi da te, mio bene 愛する人よ、あなたから遠く離れ" (Sifare)

シーファレの第2幕アリア "Lungi da te" のモーツァルト当初の曲は最終稿と多くの類似点を持っている。ピエトロ・ベネデッティ —— 最初のシーファレ役 —— はミラーノに着いた最初のメンバーであった(彼はまだ12月初めには到着していなかった)。そして彼のアリアはそれゆえ最終の期間に書かれなければならなかった;モーツァルトの父はヴォルフガングに「衣装を体形に合わせるように彼の登場を待つのが好ましい」と書いた。もし "Lungi da te" の初稿がベネデッティに完全に合っていなかったとすれば、第2稿はメロディの形を逆行させ、多くのディーテールを変容させ既に明らかに心地よいが、オリジナルの色合いや音楽的風景を大胆に変えることをしていない。一方、第3、4稿はこの第2稿のヴォーカルラインをキープし、ホルン・ソロの拡張を追加している。この付き纏うような追加は、アルペンホルンが山頂から山頂へと吹かれている様を呼び起こすが、これはモーツァルト以後のホルン協奏曲における楽器の使い方とは非常に異なっていて、シーファレがアスパーシアから遠く去って行こうとするに当たってのシーファレの別離の激情を雄弁に強調する。アリアは効果的にダブルコンチェルトとなっていて、2つのソロラインが2人の別れていく恋人たちとリンクしている。

モーツァルトのオリジナル手稿譜はBセクションの終わりで途切れている。しかし、モーツァルトの書き残した部分から完成版を作るのは全くの単純作業である。第2項の該当部分は成功

裡に反復にリンクした和音を達成している。そして、私は他の同様の完成オペラに従ってこの反復を短いものにした。

**No.14 "Nel grave tormento 私の胸を締め付ける" (Aspasia)**

このアリア最終稿は ABAB 形式であり、気高いアダージョで始まり快活なアレグロ、そして両パートが繰り返される。調はヘ長調、オーケストラはフルート、オーボエ、ホルンそれぞれ一対ずつ。モーツァルトは初稿では最初のアダージョのみを作曲、そこではいくつかの調性、いくつかのオーケストレーションがあり、おそらくプリマ・ドンナが激しいアレグロセクションを欲し、新しい開始を要求する必要はないと感じたからであろう。

オリジナル稿の完全演奏版を作成するに当たり、また、モーツァルトの魅力的な初草稿の文脈を与えるために、スタンレー・セイディはアダージョの完全な反復を作り上げる必要を感じた。今回は主調に始まり、モーツァルトの最終稿の素材の扱いに寄り添いながらモデリングしている。また、彼は偉大な技術、趣味、よき判断を持っている。

**No.16 "Son reo; l'error confesso 私は罪人です。非を認めます" (Farnace)**

最初のアリアのジュゼッペ・チコニャーニはモーツァルトが彼のために書いた音楽に不満を言うこともできたが、このアリアの書き換えはモーツァルト自身の判断によるものと考えられる。このオペラ全曲の文脈を最も節約し、圧縮する必要性に基づいている。基本的に最終稿は初稿よりはるかに短くされている。同じ楽想で書かれているが、より一層コンパクトな形に圧縮されている。初稿は小反復があったであろうが、音楽的により本質的なものであったであろう。またスコアリングは2つのトランペットであり、改訂版には使われていない。

**No.18 Duet, "Se viver non degg'io 私がもう生きていられず" (Aspasia, Sifare)**

この二重唱の初稿は最終稿とは非常に異なっている。調はイ長調でなく変ホ長調、構成は最終稿とは異なり、開始のアダージョが繰り返され、ABAB を構成する。モーツァルトはアスパーシアの第3幕での壮大なアリア "Palid' ombre" を念頭においていたのであろう。それはまた変ホ長調であった。あるいは彼はサリエリがメモワールで参照している伝統を知っていたのかもしれない。それには、このような恋人の二重唱は常にイ長調で書かれるとあった。いずれにせよ初稿は素晴らしい作品であり、最終稿より長く、より難しいにもかかわらず、全くヴォーカル声部の難しいチャレンジは歌手が書き換えに固執する原因に充分になりえた。

**No.20 "Vado incontro al fato estiremo わしは最後の運命に向かって行く" (Mitridate)**

モーツァルトはミトリダーテの最後のアリアを1回のみ書いた。しかし、上演時デットーレはとにもかくにもガスパリーニの曲を歌うことに固執した。モーツァルトは彼の望みに同意し、—— 彼はおそらくこの上演にほとんど選択肢はなかった —— 結果として公刊されたアリアはつい最近までモーツァルト本人のものと思われていた。一方、しかしガスパリーニの曲はモーツァルトのものと比較してそんなに悪いというわけではない。ガスパリーニのものは注意を呼びかけるものとして提供される。モーツァルトの曲は音楽の言葉から展開される天才が既に多く発展され、そしてオペラ・セリアの劇的要素に美しく変化されていく。

■出典：Signum Classics SIGCD 400

歌劇《ポントの王ミトリダーテ》K.87 (74a)

クラシカル・オペラ・オーケストラ Classical Opera

イアン・ページ Ian Page 指揮

バリー・バンクス Barry Banks (ミトリダーテ、ポントの王/テノール)

ミア・パーション Miah Persson (アスパーシア、ミトリダーテの婚約者/ソプラノ)

ソフィー・ベヴァン Sophie Bevan (シーファレ、ミトリダーテの息子でアスパーシアを恋する/ソプラノ)

ローレンス・ザッツォ Lawrence Zazzo (ファルナーチェ、ミトリダーテの長男でおなじくアスパーシアを恋する/カウンターテナー)

クララ・エク Klara Ek (イズメーネ、パルティア王の娘で、ファルナーチェを恋する/ソプラノ)

ロバート・マレー Robert Murray (マルツィオ、ローマの護民官/テノール)

アンナ・デヴィン Anna Devin (アルバーテ、ニンフェアの領主/ソプラノ)

(作成：2015年2月27日)